

午後 1 時 5 分 開議

◎議長（佐藤平一郎君）

休憩前に引き続いて会議を開きます。

一般質問を続けます。36 番与口登美夫君。

◎36 番（与口登美夫君）

若葉会の与口でございます。今回一般質問の機会を与えられましたことを、たいへん喜んでおります。私は新人でもございまして、各予算のバランスをにらみ合わせての具体的な質問が、はなはだもって欠ける点について残念に思うわけでございますけれども、今回質問に当たりまして、新人として、きわめて抽象的ではございますけれども、質問させていただきます。なお、農林土木その他についての質問もあるわけでございますけれども、今回は、私が公企業商工関係の委員としてなっておりますので、商工にしばってご質問申したいというふうに考えておるわけでございます。

現在、柏崎の町を見た場合に、一口に言って、活気のない町ということができるのではないかというふうに考えられるのでございます。人口の減る町は、また先細りの町と言っても差しつかえないというふうな現状でございしますが、人口の減るということは、また若者が減っていく、若い労働力が減っていくというふうに言っても差しつかえないと考えておりますが、この若いピチピチとした労働力、将来の明かるい優秀な人材をつなぎとめ得ないということは、将来の柏崎に非常にマイナスだと考えております。したがって、これからの柏崎をいかに対処すべきかという点について考えをめぐらした場合に、市勢はこの若い労働力をいかにつなぎとめるかという点に、私は一番重要な点があるのではなかろうかというふうに考えております。

柏崎には高校も数あり、かつ、また近郊に高専、あるいはまた新大を控えて数多くの人材を養成しながらも、この柏崎の町は人材養成所というふうな結果に終わっていることは、非常に残念なきわみでございます。かつ、また長男をも最近はつなぎとめ得ないというような状況は、いつにこれらの若い労働力が出ていくということは、柏崎市そのものに対する赤信号として、魅力のない町として指摘しているものと受け取っております。

現在の若い人たちを見た場合に、私は、郷土愛というようなセンチな感情よりも、実利とムードというものに分析をしてみた場合に、引かれるのではなかろうか。すなわち実利と申しますと、産業の強化で将来が明かるく、世界水準並みの労働条件、あるいはまた高賃金で生活の安定ができ得る町であると断定しなければ、こういった感じが出ないと思います。またムードというものも、若い労働力、あるいはまた老若男女を問わず、やはり、いこいの場というものを求めていると思うのですけれども、この町の中にあっては、なかなか、そういったところもないように見受けられます。したがって、次の 3 点について私は市長に質問を申し上げたいのであります。

まず、これからの柏崎のもっとも大切な点といたしまして、雪国柏崎の風土に合った新工業の導入というものを、いままでどういった活動をやってきたか。これからの構想を聞きたいということでございます。柏崎は、農家が大半を占めるとはいいながらも、狭い面積の中で、しかも、これからの若い労働力は、それらの狭い面積をさらに高度な技術導入によって近代化しようとしておりますけれども、こういった点からくる余剰労働力、あるいはまた、市のせばめられた収入の中にあっても、世間並みの生活水準というものを求めております。したがって、これから農家の余剰労働力をできるだけ生み、それを収容できる産業というものを、私は、この土地の中に養成しなければならないと考えております。

現在の農家を見た場合に農業米収入で一家をささえているというのが大半でございます。しかるに現在、その余剰労働力をいかに活用するかという点に、私は市長の施策として強いものが見受けられないような感がいたします。したがって、この振り向け先は、残る２次産業か３次産業になるわけでございますけれども、市の当面の政策といたしましては、直接生産部門であるところの２次産業を育成し、この発展が１次・３次産業に結びつくようなものでなければならないと考えております。私は、この町のいろいろ中央に出ておる政治家、あるいは知識人、あるいはまた事業家など、有力な方がたくさんおるといふふうに聞いておりますけれども、市当局は、これら先生方と現在までにどういう連けいを持って、あるいは陳情など多額の金を使って推進してきたか、私はそれらの一端を聞きたいと考えておるわけでございます。

先ほど市長の答弁の中に、「余れる土地の財力を貧困の所に流す」という答弁がございましたけれども、もちろんそれも大事でございますけれども、それより先に貧困の土地は直接自分の所で生産をし財力をつけるような政策をやるのが、私は政治であると考えております。これらの先生方との連けいの中で、はたして協力方を先生方とやってまいったのか。あるいはまた、逆に、柏崎という土地はそういった２次産業が育たないという点で断定をくだされたのかどうか。この点について私はお聞きしたいと考えております。

また誘致をするに際しましても、あらゆる観点で、来る企業にとって魅力ある土地でなければならないわけでございますけれども、市の条件として、それらの企業を誘致する場合に、どういう態度で迎え入れるのか。どうすることで育成をしていくのか。常々検討の結果を各方面に投げかけてあるのかどうかという点についても、お聞かせいただきたいと考えております。

これからの新産業は、市民各層が参加できるような産業でなければならない。また２番目として、将来高度に成長が見込まれるもの。３点は、付加価値の高いもの。４点は、青年層にも魅力ある産業として受けられるもの。すなわち技術革新の波に乗った、新しい時代感覚にマッチしたものでなければならないと思っておりますが、柏崎は雪国でもありますし、いろいろ輸送力に問題があると思いますが、こういう中で、従来いろいろ検討されたこともあったと思いますが、重工業のようなものは育たないと考えております。すなわち、この土地独特の特徴として起こる豊富な労働力を特徴とさせる労働集約産業のようなものの中で、手工業、あるいは

部品産業のような中で付加価値の高いものを選ぶべきだと考えております。

また、日石問題等も起きている今日、それらの存置撤廃はこの場で論ずることは別といたしましても、石油産業のような、石油化学産業のような点、あるいはまた軽量かつ、受け入れやすい電気器具産業であるとか、あるいはまた金属機械部品産業、加工業というようなものに当然目をつけていかなければならないと思います。こういった点を強力に推進し誘致することこそ、私は政治であり、柏崎の将来を発展させる根本的な問題であると考えております。こういった問題点を除外して、いたずらにただ、へき地の道路に砂利を敷くとかどうとかのうまさは、単なる管理的なうまさであるというだけにすぎないと考えております。この点から、市当局の予算等を見た場合に、非常に非生産部門の投資類に比べて直接生産部門の投資類が少ないのではなかろうかと考えております。そういった前向きの姿勢が私は足りないと考えておりますが、この点についてもお答えを願いたいと考えております。

また既存の工業につきましても、いわゆる魅力ある産業基盤の確立という点に立った場合、現在市当局では金属団地の育成をやってまいりました。偉大な業績と考えておりますけれども、しかし今後の育成について、私はただ単に現在の所に集めたにすぎないのではないかというふうに考えております。

資本の自由化が続々と押し寄せてまいりまして、業界においては産業の再編成、あるいは大資本においては……大メーカーにおいては、体質の改善、あるいはまた強化という点で懸命であります。この新しい時代に、現在の団地の運営については協同組合が設置されておりますが、この点まだ個々の経営によるむだが多見受けられると考えております。こういった点からの経営のあるいは苦しさというものが、従業員の生活レベルそのものを下げておると思いますが、社会的経営責任に立って、大きい視野に立って、私は今後1つのセンターのようなものをつくってやっていかなければならないと考えておりますが、この市においてはそういう経営者はおらないと思いますけれども、いろいろの経営者にあつていままで話している中で、中小零細企業の経営者については、目ざめ方が少ないのではなかろうか、われわれと話していても、犬が星を見ているような目こつきの方もありました。市当局は適当な指導を今後行なって、これらの合理化推進により生産性向上運動をやることによって、もっと前向きな政治をとっていただきたいと考えております。

これらの運営によって、現在の需給についての合理化も、直接、中央や方々に働きかけ、それを適当に各工場に配分する。あるいはまた、運搬についても、いたずらに多くの車を持たないとか、経理等についても一括した会計事務機等でやるとか、いろいろな合理化の道があると思います。また団地だけでなく、他の工場所在地等のまわりを見ても、いろんな交通等の面の運搬等に対する道路の整備が2次産業に対する配慮が足りないのではなかろうかというふうに考えております。また設備の面でも、非常に、共同で知能を集めた設備投下によって有効にやらなければならないと考えておりますけれども、現在個々による設備のむだは、いたずらに経営の苦しさと従業員の苦しさにしわ寄せされていると考えておりますが、いたずらに豚が金を持った程度の設備をやらないで、もっと知能を集めた有効な投

資をやるような指導を市でやっていただきたいと考えております。

現在の団地を見た場合に、まだ周辺に火葬場もあります。こういったものをなくし、緑の芝生を設けるとか、厚生施設を共同で設けるとか、共同で食堂をつくる、あるいはまたアパートをつくる、いろんな手がたくさん……共同で理髪店、医務室、フロ……いろんな点に手をつけたならば、私は、若い労働力の確保並びに、今後逼迫する労働力の確保については、順調に進むものというふうに考えております。

これらの流出の一端と、さらに現在若い労働力の流出の一端は、低賃金にもあると考えております。現在、私は高賃金による高生産をめざすような経営者の育成というものをやっていかなければならないと考えておりますが、関東、関西、あるいは北九州並のりっぱな賃金を払えるようなものが、こういった団地の育成によって私は魅力ある柏崎市というものに将来発展させることができるというふうに考えております。こういった点に対する知識、あるいは意欲というものが経営者、労働者、あるいは第3者の立場においても非常にないと、専門家の中にもないと考えておりますが、こういった指導教育といった点を市執行部としてどのような形で押し広げていくのかどうかを私は聞きたいのであります。

最後に3番目といたしまして、柏崎の町自体を今後どのような町づくりをしていくのかという点についてお聞きしたいという点でございます。先ほど申し上げました中に、若い青年をつなぎとめる中にムードがあるということを申しましたが、このいこいのある町というものは、この天然自然に恵れた地形を十分に利用し得るならば、私はりっぱな観光都市ができると考えております。特に刈羽三山等もあります。これをつなぐ大ドライブウエーとか、いろんな点で活用し得る。あるいはまた美術工芸についても数多くの先生方を輩出している現在、こういったものを生かす観光売場というものを合わせてやっていくなれば、柏崎はもっとそういった面でも開けると考えておりますが、それらの観光都市としての柏崎の基本的な考え方は、どの辺にあるかという点を市長にお聞きしたいのであります。すなわち観光といっても3通りあると思うのです。比較的、セーラー服を着たような少女・少年の集まる、簡単に言って金を落とさないお客でございますけれども、健全な観光都市とでも言えるかもしれませんけれども、こういった観光都市。もう1つは観光都市、観光施設そのものが直接生産を生むもの、すなわち、たとえば米山大橋は、大きな将来の柏崎の交通をになう一端として重要な一面を持つ一方、観光として役立っております。北九州のように百万ドルの火を見せる。その火は一面観光として多くのものを持っております。工業都市として直接ものを生むものが、また観光としても生きております。こういった生産を土台とした観光都市として柏崎は進むのか。あるいは別府・熱海のようにピンクムードいっぱいの消費を中心とする観光都市をつくらうとしておるのか。この点市長はどういう構想をもっているのか。観光、観光とただ騒ぐだけでなく、基本的な観光都市のつくり方を私は聞きたいというふうに考えております。

以上3点について、市長のご答弁をお願いしたいというふうに考えます。以上でございます。（拍手）

◎市長（小林治助君）

36番議員にお答えを申し上げます。

非常に熱意のある、前向きなご意見をお聞かせいただきましてありがとうございます。憂うところは全く同じでございます。人口減少を招来するという大きな原因は、この土地に安定して、なお繁栄できる、希望の持てるという産業がありますれば、若年労働力はここにとどまるでありましょう。同時にまた、それだけでは足りないから都市的な雰囲気、ムード、そういうものを合わせて行なって、魅力ある街づくりをやることによって、優秀なる若年労働力をここにとどめおくことができるんだと、こういうご意見に対しては、全く同感でございます。そのような基本的な考え方で、過去において施策を進めてまいったつもりであります。

まず第1に、安定した、繁栄のできる産業が立地をするための産業基盤の整備が行なわれなければならないと思います。輸送ができない、鉄道がうまくゆかない、あるいはエネルギー源がない、海上輸送についても所要な輸送の体制のできる港が必要である、いろんな諸条件が重なり合いまして、その土地の産業は生々発展すると思います。現在私どもの町は、そういう基盤整備の面においては、市民ぐるみの熱意によってようやく陸の狐島という汚名を返上して、いま私どもの町には基盤整備に関しては黎明が訪れたという感じを持っていると思います。ただ、そのことを若い人たちは、みずからの住む郷土というものは、みずからの力で生々発展せしめるという意気がなければならんことも、また事実であろうかと思えます。なぜならば、実例を申し上げます。いま日本の製菓業における3大メーカーの1つである北日本の吉田吉造社長は、「製菓という、そういう産業の条件から見ると、柏崎のごときで工場を持っているということは非常に不利である。しかし、私はこの土地に生まれ、この土地に世話になった者であります。私の献身的な努力、柏崎の産業伸展のために尽くすことによって、私は郷土に対する恩を報いる道だと、このように考えてがんばるのです。」こう吉田吉造氏は言っておられました。そして、死ぬまであの企業努力を続けられてきた。その基盤というものが今日受け継がれて、立地条件の不利を克服しながらも日本のメーカーとしては、製菓業における3大メーカーの1つにまで成長をしていったのであります。したがって、私が申し上げたいと思うのは、産業の基本は、吉田吉造さんばかりではないのです。一般の大衆がここに残ろうという、ここで就職をしようという、その基本的な原則は、全く36番議員のおっしゃるとおりであります。同時にまた、郷土を愛するという熱意もまた、企業を生々発展せしめる1つの要因でもあるという実例を申し上げます。

で、話が少し横道にそれましたが、雪国で、しかも柏崎のような地帯における農業、これを基盤整備いたしまして自立農家を、あるいはまた安定した農家経営……これは農業経営でなくて農家経営をやっていこうとするには、いつも申し上げている考え方でありすけれども、これはやはり、2次産業の発展による吸引力、そういうものが合わせ行なわれてゆきませんと、農業の問題はなかなか解決ができないし、また工業と農業というものは……かつては農・工・商というものは、とも

いたしますと、利害が相反するとき考えがないわけでもなかったわけですが、しかし現在の時点において、産業界、これは農業も工業も商業もすべてであります、お互いが相関関係を結んでおります。その中で、工業を持つ柏崎においては工業を早く発展をせしめるということが、1次産業の解決の道を開くことである。そして、1次産業・2次産業の発展は、即、第3次産業の繁栄につながるんだと、こういう産業体制をとってきたわけであります。産業は、ぶった所がはれたようにすぐよくなろうとは考えられません。先ほど申し上げましたように、そういう基盤整備を行ないながら、産業が立地をいたしましても、産業としての経営が成立し得るような条件整備、これが第1番目だ。そういうことで努力してまいりました。その成果はいまあがりつつあります。こういうことをいま申し上げてみたわけであります。

それから次に、柏崎の旧来の産業施策の中で、柏崎からもたくさん優秀な方々が旅に出て事業活躍をなさっております。そういう方々との連けいを密にいたしまして、その人たちのまた意見を聞きながらも、柏崎に誘致でき得る産業については誘致をいたしたい。こういう考え方で、そういう組織をつくっているわけでありませう。これはもう、結果的ににおいてはできませんでしたが、昨年度、理研系統のある会社が東京においてある企業と合併をします。そして、その不要の敷地を売却することによって、当市に相当な規模の工場をつくってゆこう。こういうようなことで、その会社の幹部の方々も柏崎にお越しいただいたり、また、われわれも出向いたりして、この2～3年、そういう努力もしてまいっておりますが、実を結ばなかったということでもあります。これは与口さんのほうもご存じだろうと思しますので、また会社の名前を出すのもどうかと思いますので……そういうふうに申し上げておきます。また議員さんのご関係の中でも、ある議員さんは農業の飼料問題……飼料の生産会社が柏崎にあるならば非常にいいじゃないかというような考え方で、それらをごあつせんいただいたこともあります。しかし、その工場が柏崎に立地するためには、外国から雑穀を輸入しなければなりません。雑穀を輸入するためには、1万トンの船を入れる港が必要になるのであります。残念ながら、当市の港はまだそこまでは行っておりません。ようやくいま当市の港は、3,000トンの商業港、こういうことになっております。第3次5カ年改定計画で、柏崎は新潟県全体の木材事情の中から、柏崎に対岸貿易のソ連材等が入船……そういう材木を積んでくる船が柏崎に入港できるように、というようなことで、これからそういう改定計画も具体的に進んでいくことになりましょうが、それにはまだ4～5年の時間を必要といたします。しかし、そういったものが入ってくることによって、柏崎の製材業や木工業は他の土地の同業者と競争するだけの有利な力ができるはずであります。そういう企業が立地をして、他と競争しても有利になるという条件、そういうものをつくり出すところに私は政治や行政の努力が必要になろうかと思っております。

お話の機械金属団地は昭和33年から建設されたと思いますが、そこに建設されますためには4カ年の時日を費やしております。それは集団化事業を行なって、政府の無利息の資金を導入するためには、まず柏崎に通産省による工業適地指定

というものを受けなければなりません。適地指定を受ける前提といたしましては、通産省による工業立地調査が必要なのであります。これには国の予算が必要であります。当時、新潟県においては、新潟市と直江津市だけがこの工業立地調査が済んでおりました。34年、柏崎の中小企業をどのようにして生々発展せしめるかという中で、中小規模の工場集団化事業、これが一番柏崎には適切な仕事であろう。これをひとつ中核にして仕事を始めようということで、ずいぶん通産省にも通った。富山の工場団地もその時分にはできておりません。しかし、一応土地買収計画等はございまして、これらを見ながら、そういう行政上の手続きをとって、当市域では34年にそういう陳情等をやりましたが、結果的に調査が終わりましてのは37年でありました……ちょっと年次が狂うかもわかりません。37年あたりによく適地指定を受けて……6工業団地の指定を受けたのであります。その指定された団地に工場が集団化され、そこに移ることによって、はじめて政府のそうした中小企業の補助対策の対象になるのであります。指定をされていない土地……どこに行っても、どこでもいいから、工場を20つくったからすぐ政府の補助の対象にせよといっても、できない。そういう法律になっているのであります。

ですから、企業というものを発展させるためには、それぞれの準備が必要であります。その整備というものは、うまずたゆまず、ある1つの目標を立てながら、長い努力によって、そういう条件整備が行なわれていくということになるわけでありますので、そういう点についてもひとつご理解をいただきたいと思います。

おっしゃるように、柏崎に重工業……これは、柏崎の産業立地条件の中で一番困るものは、工業用水の問題であります。しかし、工業用水といえども科学の進歩によって海水を真水に変えるという方法もあります。ただし、コストが高いから、なかなかこれは工業用水として用いる段階には至っていないということでありますから、これは将来の問題でございましょうけれども、柏崎の場合には工業用水が非常に不足であります。ですから、工業用水を確保するためには、小さい川ですけれども、鯖石川上流に10年間かかって、あそこに多目的の開発ダムを設置するということがようやくきまって、来年から着手されるということになりました。しかし、これでは工業用水にはなりません。どうしても信濃川の水を柏崎に分流してこなければなりません。それは信濃川の左岸から渋海に水を落として、渋海からさらに鯖石川に水を落とすという構想がございます。いま開発ダムをつくるということがまず第1着手であります。次に、水がよけいいるならば、そういう可能性というものを……調査の結果、そういう可能性があるということだけは、調査をしてあるはずであります。

また、柏崎だけではございません。新潟県の産業を基本的に発展せしめていくためには、雪という問題を解決しなければなりません。冬季交通の確保がそれであります。そういう冬季交通確保というような問題も、自力ではなかなかやれません。そういうものは政治によって解決しなければなりません。それですから、県をあげて「冬季交通確保に関する法律」というようなものをつくらせるだけでも、どれだけの政治家の努力が結集をされているかということ、われわれは考えてみなければならぬと思えます。

いま、新潟県が新潟県の産業を発展させていくために、一番われわれが期待しておりますものは、ソ連の液化ガスの輸入でありましょう。昨日も田中角栄先生のご説明がございました。カラフトから日本にガスを輸入する場合に、新潟港の1番の競争相手は秋田港だそうであります。しかし、これをナホトカから船で持ってくるということになれば、新潟港だということになっております。それで、このガスの輸入はナホトカに大体きまったそうであります。しかし、パイプを敷設するためには44年まではかかる、45年になれば輸入が可能になる。このようなことを言っておられます。

私がいま、直接のご質問にはずれて、このようなことを申し上げますのは、柏崎の産業を発展せしめるためには、柏崎だけが独立して発展のできるものではないということでもあります。それですから、産業はすべて関連をするのでありますので、それら新潟港の将来、新潟新産業都市の将来、長岡内陸工業地帯の将来、直江津工業都市の将来、そして柏崎の置かれている条件や立地やそういうものをよく考え、われわれはわれわれなりに、わが柏崎の自然条件というものをより豊かに生かしていくかという、そういう調査や考え方や実行が、いまわれわれに課せられている課題ではなかろうかと思えます。このような条件の中で、私どもが柏崎市の産業を発展せしめるためには、おっしゃるとおりできるだけ付加価値の高いもの、これはやはり、ねらうべきだと思います。そして労働……ある程度たくさんの人間が使われる。これもおっしゃるとおりだと思います。

そこで、いま柏崎はご案内のとおり、われわれの周辺には地下資源・石油があまり出ません。ガスもあまり出ません。ですから、日本石油は小規模の内地油の加工生産に切りかえていきたいというような、そういう問題が起きているのであります。しかし、将来われわれが石油化学というような、そういうものを指向するとするならば、やはり私は、液化ガスをどのようにして柏崎に引き入れてくるかということが、その前提条件にならなければならないと思うので、いまのようなお話を申し上げたのであります。柏崎が液化ガスを本当に利用できるという諸条件の中に、これは私はしろうとでありますけれども、いま考えられますのは、地下貯蔵にはまことに適当な地域があるということでもあります。そうしたものは、帝国石油の技術屋さんあたり、専門家あたりにいろいろお話を聞いて、柏崎には20億立方でしたかネ……20億立方を地下に貯蔵できるところのガス貯蔵の構想がこの付近にあるのです。あるいは関原油田地帯……。こういうように私どもの内々の調査はやっております。それらのものが、液化ガスを柏崎に輸入し、あるいは工業港を開発するというような場合にどのように役立っていけるかということは、いまから機会あるごとに、要路に対しては、「こういう条件は、何とか柏崎にそういう産業を起こす1つの要点にならないだろうか」というようなことを言っているわけがあります。

またご案内のとおり、水力が火力に移り、火力発電が原子力発電に移るということは、これはもう現在の化学時代において当然の流れであります。そういう意味で、これはご案内のとおり、理研の会長をやっておられます松井さんのご指導等々をいただきながら……あの方はわが国の原子力関係の副会長をなさっておられるわ

けでありまして、そういうような問題については非常に詳しい方であります。そういう方々といろいろご意見を聞きながら、あるいはまた、そういう方々のご感想もいただきながら、われわれは、それが柏崎の地域将来にどのような貢献や、そして、そういうものを誘致するだけの諸条件がそろつか。そういうことについて、われわれはよく調査をしなければならないと思うのであります。これはことしの予算で通産省が県に委託しておりますので、近いうちに地質調査から始められることになろうかと思ひます。

電気、機械金属等いろいろお話がございました。機械金属は、いまでも既存の産業を生々発展させることが一番柏崎に若年労働力を吸引できる大きな道だと思ひます。それですから、機械金属団地における投資の合理化……投資が重複しないように、あるいはまた経営上の指導、いろいろな問題があろうかと思ひます。これらはもちろん、行政がこれに責任なしとは申しませんが、われわれの陣容で専門家のそうした方々を指導するだけの實力は、残念ながら待ち合わせておりません。それですから、そういう技術指導や生産をどのようにして上げるかというのについては、それぞれの企業の中に専門の方々がおるわけでありす。そういう専門の技術屋を1つの組織に集めて、その方々に依頼をして、行政がそれと力を合わせながらいっしょにやっていく、いわゆる民間と行政とがタイアップした組織化の中で、企業の合理化や推進や生産性の増強をはかっていくことが賢明だと思ひます。そのような方向でいろいろ施策を進め、現にまた実施しておるものもござひます。そういう意味ではどうかひとつ与口さんなんかも、大いに力を貸していただきたいと思ひわけでありす。……

いま議長の方から注意がございましたけれども、できるだけ産業に対する考え方をご理解いただいて、そして皆さん、特に36番議員にご協力をいただきたいと思ひるので、注意を受けながらも、もう少し話を続けさせていただきたいと思ひます。……そういうことが、私は前向きの産業対策につながっていくであらうと思ひます。

それから、たとえば工業団地内におけるいろいろな福祉施設、あるいはまた住宅の問題等いろいろの施設があるわけでありす。これは労働力を確保するためには、そうした企業が福祉施策、労働環境の整備をやっていかなければならんことは当然でありす。しかし、小さな企業ではそれはできません。そこに私は協業化、集団化の意義が出てくると思ひます。ですから、ああいうものを勧奨をして、また業界もそれには賛意を表されてつくれたのでありす。

次にねらうものは、10人、20人程度のもっと小さな既存企業でありす。これを工場アパートと通称言っておりますが、協業化でありす。これらを1つの工場の中に集めて、投資の重複を避けて、合理的な投資をやっていく。また計算事務にいたしましても、集約できるものは集約してやっていく。電力でも1か所で受けて配分できるものはそうやっていく。……いろいろな方法がありましよう。その中で、労働条件の整備が行なわれ、勤労者に対する福祉施策、住宅の設置も、あるいはそういう工場に屋内運動場とまではいかななくても、テニスコートやバレーコートぐらいできる。そういう環境がつくられていくであらましよう。そういう方向

で、私どもは旧来の仕事を進めてまいったと、このことをひとつご理解をいただきたいし、そのような方向で一生懸命がんばっていきたいと思います。

次に、観光の基本的構想はどうかと、こういうことでございます。観光には2通りございます。地域住民の観光がございまして。産業としての観光が1つございまして。2通り考えてございます。

そこで、たとえば、鯨波に林道をつくる、鯨波の水源地を公園化していく、そこに散歩道路をつくる、桜の木を植えるがごときは、地域住民が自分たちの生活をより楽しくしていくためのレクリエーション地帯になるであります。しかし、旅の方々を吸引して、そして、それが1つの事業として成り立っていくためには、もっと規模の大きなものでなければなりません。そういう意味で、広域観光ルートの設定を旧来はかってまいったのであります。

海岸のほうから申し上げますと、弥彦・米山ドライブライン……ドライブウェイの形成などは、その構想の1つでございます。米山は、本年度からようやく林道開設ができて、待避所をつくりますならば、自動車が交通可能でございます。弥彦は有料道路として開発が始められます。そして柏崎―寺泊線は、さらに寺泊から新潟まで延びるようになります。県道認定が終わっております。そういうものをつなぎ合わせて、さらに弥彦から妙高につないでいくというあたりの、新潟県の海岸美を生かすその中で、柏崎は海岸美においては有利な立場に立つてあります。あるいはまた……時間もありませんのでできるだけ簡略にいたしますが……252号線を活用する会津磐梯、あるいは奥只見と柏崎を結ぶこれらの広域観光ルート、これもその1つであります。今後考えられますのは、国道17号、湯沢と柏崎を結ぶという国道昇格運動をやっております。これは清津峡あたりと結ぼうとするものであります。そして、小さくは刈羽三山であります。刈羽三山は……大体、観光事業というのは、なかなか国家の補助金や県の補助金がつきません。そういうものをわれわれのような力のない都市であっても、それができるようにするためには、何とかして、米山や黒姫や八石を結ぶ県道を認定させて、これに国の公共事業を導入することによって、はじめてその構想が可能になるのであります。いま、青海川―谷根線というのを黒姫からさらに黒姫を通して県道認定するということは、非常に困難であります。そういうものを認定させるのは大衆の力であります。……先ほど、私は、陳情というのをちょっと申し落としましたので、この機会にいっしょに言っておきますと……陳情は、われわれの地域の実情というものを役所や上級の政治家によく知らしめておくということでもあります。仕事をやっていくために、実態を知らなかったり、理解がなくては予算はつかないのであります。それ以上に強い陳情を行なおうとするならば、請願というのがあります。これは、国民や県民や市民に与えられた市民の権限であります。これは請願の権利であります。そういうものを議会にぶつけていけば、いやでもおうでも、議会はそれを審議して、いいか悪いかの結論を出さなければならないということになるので、われわれが、そういう意味で黙っておっては、青海川から谷根……これは県道でございますが……谷根、さらに上条の野田へ出て、黒姫山ろくを通して岡田へ出る道路などというのは、県は認定しっこありません。そういうふうにして、1つ1つ、将来、どの

ようにして柏崎を観光的な基地として開発していくかという想定を立てながら、一步一步前進していこうというのが、いまの態勢であります。ですから、柏崎の場合は、やはり米山はわれわれの宝であります。佐渡はわれわれの宝であります。一番近いんです。ですから、東京と佐渡を結ぶ短絡路線を国道にしてください。柏崎から小木まで定期航路をつくってください。それらの前提要件として、佐渡の小木と柏崎の姉妹都市宣言ぐらいは、ひとつこの予算を通過させてもらったならば、7月の二十何日ですか、やろうじゃないか。そうやって既成の事実をつくりながら、定期航路をここに引っ張り込んでくるという基盤をつくっていきたいんだと、このような考え方をしているわけであります。

私どもは何か公共施設をやりますときに、その土地に見合う何かをつくっていこう、こういう考え方。それが観光に大きな貢献をするのであります。それがいま一番効果をあらわしておりますものは、やはり米山大橋であろうと思います。次には、252号会津若松線には、こちらのほうには橋ですが、山には日本一の、もっとも近代化された模範的な隧道をつくってはどうかなどという、そういうことをいろいろお願いをしているわけであります。どうか、ひとつ、いろいろ、与口議員さんからも……最初のご質問でもございます。非常に生きのいい、フレッシュなご意見もいただきまして、私もまた議長から注意を受けながら基本的な考え方についてまずご理解をいただいております。それが、今後のいろんなご質問にも合理化と申しましょうか。質問の合理化という、応答の合理化ということもないでしょうけれども、やはりそういうものを1通り経緯を述べておいたほうが、今後、いろいろご意見をお聞かせいただく場合にもいいんじゃないか。こんなふうにも思いましたので、あえて冗長かえりみないでご答弁申し上げた次第でございます。どうかひとつ、よろしくご協力のほどお願いいたします。

（9番石黒武久君「具体的なことはさっぱりわからない」と呼ぶ）

◎36番（与口登美夫君）

具体的にはどうも、というような声もありましたので、要点をしぼって質問し直したいと思っております。

非常にていねいなご答弁で、感銘深くお聞きいたしました。現在、理研の収入は約27%柏崎に落としております。もし、理研がなくなった場合に、ここにおられる議員さんも議長さんも、すべてが約30%の減収になるということでもあります。すなわち、これにつながる2次産業の関連などを合わせますというと、柏崎に占める現在の2次産業の位置は非常に高かろうと考えておるわけですが、現在の2次産業が育成されたのは、昭和初期でございます。したがって、最近の人口減に伴う昭和40年代には、再びこのような大きい産業がもう1度来てもいい時期ではなかろうか。こういうものに対するどういう活躍なり活動を具体的にやっておるのか。情熱を傾けて打ち込む政治的な勇気があるのかどうかという点をお聞きしているわけでございます。かつ、柏崎市を取り巻く関連都市との連けいの中でそういったものが来るということは、十分承知をいたしております。これらの関連都市の中にあっては柏崎は特にそういった点、遅れているのではなから

うかというふうには指摘しているわけでありまして。連けい都市との絡み合わせの中で、柏崎がそれらの地域より進んで開発されておるのかどうかをお聞きをしたいと考えております。

最後に、金属団地の指導並びに教育については、技術的な指導の点に触れたわけではございません。現在、個々によるムダがあるが、これをまとめて協力的協業の中で発展する以外に道はないんだ。そういうものを推し進めていくのは市執行部の政治力と考えるけれども、そういった点に触れて執行態勢が教育して、あるいは指導していく考え方があるかどうかをお聞きしたい。こういうことでございます。

◎市長（小林治助君）

あとのほうが簡単でございますから申し上げます。これは、協業化を積極的に進めております。その中心として、商工課が働いております。もちろん、これは商工会議所とよく連絡を取りながら、相提携して協業化を進めております。

それから、他市より遅れているかどうか、進んでいるかというのは、これは比較の問題でございまして、一がいなことは申されないと思います。先ほども、くどく申し上げましたけれども、新潟には新潟の1つの基盤があるわけです。そこから進めてゆこうとする方向がある。直江津には直江津のものがある。長岡には長岡の、小千谷には小千谷の、あるいは栃尾、見附……それぞれがそれぞれの地域に応じた、やはり産業の振興対策をとっており、柏崎は柏崎なりにそういう振興対策をとっております。

そういう面からいきますと、まあ、私は、柏崎の場合は、非常に業界の皆さんも積極的ですし、協力的でありますので、柏崎なりに見た場合、柏崎は相当進んでおると、このように理解をしております。

ただ、大工業を誘致することに積極的であるかどうかということでございますが、大工業と申しましても、種類によるわけでございます。このまえもある大工業、これはかつては中小企業でしたけれども、現在では、その業界における立場では日本一の会社がございまして。そういうものの社長さんあたりに会って、われわれの立地条件を話しながら進出の意図などを打診はいたしております。しかし、こういうものは積極的な誘致ということではないでありましょう。要するに、状況を調査して、そして、われわれの土地にふさわしいもの、われわれの土地で誘致可能なものがあるなら、すぐ積極的に進めていこうという触手をいろいろな方向に出しておくという、そういう段階でございます。あえて積極的に誘致しようとするには、やはり1つのメドがついて、「よし、これだ」ということになりませんと、おっしゃるような積極的な態勢と申しますか、態度とは言い得ないと思います。そんなことで、答弁にかえさせてもらいます。